太宰府の文化財

181

竈門神社北谷遙拝所の絵馬 1

北谷の集落の奥に鎮座する竈門神社北谷遙拝所の拝殿に架かっている絵馬を見てみましょう。

神功皇后伝絵　1面
江戸時代　吉嗣梅僊筆

絵の題材はかつては神功皇后の三韓征伐などと呼ばれていた『日本書紀』や『古事記』の伝説に基づいた内容です。福岡県には香椎宮や宇美八幡など神功皇后伝説ゆかりの地が多いためか、絵馬もそれを題材にしているものが多く描かれ、福岡県の絵馬の特徴の一つになっています。

この絵馬は熊襲を討つために筑紫に赴いた仲哀天皇に、宝の国の新羅を帰服させよとの神託が下るが、それを信じなかった仲哀天皇は急死し、神功皇后は神託に従って新羅を攻め勝利をおさめるという伝説の中の、新羅軍との海戦の様子と、新羅王降伏の場面を描いています。

絵馬右側の龍頭鷁首の軍船が日本軍で、指揮をとる白髪の武内宿禰、その後方には皇后が座っている姿も見えます。また上部は新羅王降伏の場面ですが、神功皇后が岩に弓で戦勝の銘を刻む情景として表現されています。

作者の吉嗣梅僊は本名を寛といい、弄春園と号し、ばいせん（漢字は「梅・楳・某」と「仙・僊・山」の中から組み合わせて使用）とも記しました。文化14年（1817）、太宰府天満宮の神官の家に生まれ、明治29年（1896）80歳で亡くなりました。絵ははじめ斉藤秋圃に師事し、後に諸家に学びました。

梅僊の絵馬は太宰府や筑紫野・筑豊地区を中心に100点を超す数が残っています。

この絵馬によく似た構図の絵馬が筑紫野市山家宝満宮に嘉永2年（1849）楳僊作で残されています。

賤ヶ岳七本槍図　1面
明治6年　吉嗣梅僊筆

これも梅僊が描いた絵馬です。

画題は賤ヶ岳の戦いで活躍した羽柴秀吉軍の7人の勇者たちを賤ヶ岳の七本槍と称賛した話によっています。合戦図の中では源平合戦・川中島の戦いと共に好んで描かれたテーマです。梅僊もこの画題は好みだったのか、梅僊筆とはっきり分かるもので、筑紫野市で2枚、筑豊地区で8枚残っています。

この絵馬は北谷に住む斉藤や田村という8人の人々が奉納したものです。

▲神功皇后伝絵　板地著色
縦 99cm　横 151.8cm　枠幅 8.3cm

▲賤ヶ岳七本槍図　板地著色
縦 116.5cm　横 159.7cm　枠幅 9cm

太宰府市役所：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号　☎092(921)2121　FAX(921)1601

この広報紙は、地球環境保全のため100%再生紙を使用しています。

太宰府の文化財 182

竈門神社北谷遙拝所の絵馬 2

▲天岩戸図　板地著色
縦115.5cm　横 162.5cm　枠幅 9cm

天岩戸図　1面
江戸時代　吉嗣楳僊筆

素戔嗚尊の乱行にたまりかねて天の岩戸に籠った天照大神を天の岩戸から引き出すために、岩戸の前に神々が集まり、天鈿女命が槽を踏みとどろかし胸もあらわに踊り狂うと、外の賑やかさに大神が少し戸を開けた。その時すかさず天手力男命が岩戸を開いて大神を外に連れ出し、世界はまた光を取り戻したという神話をテーマにしています。

これは鈴や笛を奏する神々、その前で踊る天鈿女命、そして正に手力男命が天の岩戸を開け、天照大神が姿を現したという場面です。

▲忠臣蔵図　板地著色
縦 104.8cm　横 164.8cm　枠幅 10.5cm

忠臣蔵図　1面
吉村百耕筆

絵師は前回お話しした吉嗣楳僊で、71歳の作と記されているようですが、楳僊71歳は明治20年なので、絵馬木枠の銘、明治17年と合いません。消えかかった銘は67翁とも読めそうで、検討課題です。奉納者は田邨（村）正次郎です。

赤穂浪士の吉良邸討ち入りの場面を描いています。残念ながら描かれた時期は文字が消えているので分かりません。

作者の吉村百耕は明治11年に博多の櫛田前町に生まれ、昭和33年、80歳で亡くなりました。百耕は福岡で最後の絵馬師といわれ、櫛田神社近くの生家で絵馬店を開き、絵馬と盆提灯の絵を制作しました。博多弁で「エンマヤ」と言ってたそうで、覚えていらっしゃる人もいるかもしれません。死の前年まで県内各地に約２００点の絵馬を残しています。

百耕は「鉄耕画塾」を開いて福岡を代表する画家を多く育てた日本画家上田鉄耕に師事しました。また昭和40年代ごろまで活躍した東区大学通りの白水絵馬店の白水耕雲は百耕の弟子です。

北谷にはもう1枚、百耕の絵馬があります。これも文字が消えているので年代は分かりませんが、日露戦争の旅順勝利の図です。

日清戦争図　1面
明治30年　萱島秀山筆

板地著色　縦１０３・５cm　横１３６・５cm　枠幅９cm

明治28年に日清戦争に勝利した後、明治30年前後に秀山が描いた日清戦争図の絵馬が太宰府・筑紫野地域で数点残されています。

萱島秀山についてはまたの機会に。

太宰府市役所：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号　☎092(921)2121　FAX(921)1601

この広報紙は、地球環境保全のため100%再生紙を使用しています。

太宰府の文化財

183

横岳崇福寺跡

13世紀後半～14世紀半ば

調査地　白川

本年3月の市政だよりでお話しました横岳崇福寺跡の発掘調査では、建物跡の他にお墓が見つかっています。お墓は大きく三つの時期に分かれて営まれていたようです。

まず、2m前後の大きさの四角の墓域をもつお墓が数基あります。そこは区画する石や偏平な石が敷き詰められていて墓域と分かります。(写真①)

次に写真②のお墓が作られます。これはどうも前述したお墓などが土砂崩れで壊れてしまったので、そこに立っていた五輪塔を拾い集め、新しい墓所を作ったのではないかと考えられています。そしてただ五輪塔を集めて供養しただけでなく、五輪塔に囲まれた中を少し掘って、そこにお経を書いた石を納めていたらしいとも考えられています。まだ詳しい整理が必要ですが、墨書きされた緑色片岩がかなり見つかっています。

五輪塔に刻まれた梵字はそのほとんどが漆を接着剤にして金箔が貼られ、かなり立派なお墓だったと想像されます。

五輪塔の風化の具合から見ると、この墓も余り長期にわたらず、再び起こった土砂崩れで埋まったと思われます。

五輪塔が埋まった上に、そういう場所だったということを意識しながら建てられたと思われるのが、約3m四方の建物です。内部では石列と大甕が見つかり、骨片なども散らばっていました。そこで考えられるのは大甕は共同の骨壺で建物の床下に据えられ、死者が出ると時に応じて納骨の行為が行われていたのではないかということです。

ところで今回の調査で見つかったお墓は大体13世紀後半から14世紀半ばにかけて作られたと思われること。ここはそのころ崇福寺というお寺があった地域ということを考慮して、これらのお墓について考えてみたいと思います。

寺域に作られているので、崇福寺縁のお坊さんたちのお墓だろうということは想像されます。江戸時代に崇福寺のことをまとめた『横岳志』には「開山及歴代諸祖塔散在於東西林麓」とあり、調査地はちょうど東の林麓にあります。

崇福寺のお墓が作られた中世という時代の墓制については、まだまだ不明のことが多いのですが、次のような例もあります。3代の僧侶の墓所に一つのお堂を建てて、仏像を安置し堂守の僧を置いた。個人のお墓とは別に縁の人々の骨を少しずつ納めた惣塔というものが作られた。塔を立てることは善根を為すことであり、お墓ばかりでなく、お経を納めるためなどにも立てられた。また、お墓として塔を作るという行為に禅宗が積極的に関わったのではないかと考えられる例など、崇福寺の墓群を考える上で参考になるかもしれません。

太宰府市役所：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号　☎092(921)2121　FAX(921)1601

この広報紙は、地球環境保全のため100%再生紙を使用しています。

太宰府の文化財

184

阿弥陀浄土図

大きさ　縦164㎝
横87・1㎝
紙本彩色　江戸時代
光明寺蔵

（写真提供：九州歴史資料館）

阿弥陀浄土図とは阿弥陀仏の極楽浄土の有様を描いた絵です。浄土変、浄土変相、浄土曼荼羅ともいい、阿弥陀如来のほか、薬師如来、釈迦如来、弥勒菩薩、観音菩薩などの浄土図もあります。変相というのは仏教説話、経文の諸説を図や絵に変えて表現するという意味です。

浄土図は中国では隋や唐の時代から盛んに作られ、日本でも7世紀に原本が作られたという中宮寺の「天寿国繍帳」に始まり、奈良時代には浄土信仰とともに盛んに作られるようになります。特に当麻曼荼羅、智光曼荼羅、清海曼荼羅が浄土三曼荼羅といって有名です。

阿弥陀浄土図は中心に阿弥陀三尊とこれを取りまく諸聖衆が座る華座段を描き、上辺に虚空段と宝楼、下辺に宝池と、笛や鼓・琵琶などで楽を奏し、美しい舞を舞っている菩薩たちが居る宝地の段そして左右に宝樹を描くというのが、大体基本的な形です。

写真の浄土図もそのように描かれています。虚空段には雲に乗った仏や、阿弥陀如来を荘厳する天蓋が、阿弥陀三尊像の後ろには三つの宝楼閣が建ち、宝池は蓮の花が咲き乱れ、そこに浮ぶ宝地―舞台では歌舞音声菩薩たちが天の音楽を奏でています。踊りの舞台と音楽の舞台を繋ぐ左右の橋の上には、それぞれお坊さんが座っています。

画面いっぱいに阿弥陀如来の西方極楽浄土のすばらしさが描かれています。

そしてこの浄土図は宝地の左右の橋に二人の僧が描かれているところから、浄土三曼荼羅の中の智光曼荼羅に分類されるのではないかと思います。智光曼荼羅は、奈良の元興寺の僧の智光が先に亡くなった友人頼光に導かれて極楽浄土を観じ、夢からさめた後、その浄土の様子を描かせたのが智光曼荼羅といわれ、智光と頼光とおぼしき比丘、つまり橋上に二人の僧を描いている浄土図は一応智光曼荼羅といわれるようです。

この図は江戸時代の天保15年（1844）仲冬（陰暦11月）に義譲という人によって描かれました。義譲については絵仏師なのか、それともお坊さんなのか、詳しいことは分かっていません。

太宰府市役所：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号　☎092(921)2121 FAX(921)1601

この広報紙は、地球環境保全のため100％再生紙を使用しています。

太宰府の文化財 (185)

地獄絵

大きさ　縦126㎝　横84・3㎝
紙本彩色　江戸時代　光明寺蔵

前回が極楽浄土の有様を描いた阿弥陀浄土図でしたので今回はその対極に位置する地獄絵です。やはり江戸時代作で、光明寺に残されています。

このような地獄絵は六道絵と総称される説話的な仏教絵画の一つに入ります。六道とは地獄道・餓鬼道・畜生道・阿修羅道・人間道・天道の6種の世界をいい、生あるものはこの世でなした行為の善悪によって、死後このどれかの世界に生まれ、悟りの境地を得るまでこの六道の中で生死を繰り返すという仏教の思想です。この教えを人々が理解しやすいように六道の悲惨な有様や救済の様子を絵に描いて視覚にうったえるようにしたのが六道絵です。

中でも地獄は、六道の中で最も罪が重い者が堕ちる世界なので、お話としても詳しく語られましたし、絵もたくさん描かれました。現在残っているもので有名なものは、平安時代末期から鎌倉時代初めに描かれたといわれる『地獄草紙』『餓鬼草紙』『病草紙』、鎌倉時代作の聖衆来迎寺の『六道絵』、禅林寺の『十界図』などです。これらの絵に大きな影響を与えたのが平安時代中期に書かれた源信の『往生要集』の地獄を始め六道の記述です。

寺では、このような絵を人々に見せながら地獄や極楽の話をして信仰を促しました。この絵もはっきりしたことは分かりませんが、そんな絵解きに使われたのかもしれません。かつては観音堂に掛けられていたそうです。

さて、この絵に描かれた地獄の様子をのぞいてみましょう。

画面左手上には死体がうち捨てられ、犬やカラスが食い荒らしているという場面です。聖衆来迎寺の『六道絵』にもこのような場面が詳しく描かれています。真ん中の木の下に座るお婆さんは奪衣婆と呼ばれる、三途の川岸の衣領樹の下にいて、亡者の衣類をはぎ取って樹上の懸衣翁に渡すといわれる老女の鬼です。

その右下で鏡に姿を映しているのは、鏡は業鏡といい、生前の善悪の行いを映し出す鏡です。左側には剣山に追い込まれている人がいます。その下は火車が生前悪事を犯した人を地獄へ運んで来ます。その隣では業秤で生前の悪業が秤かられています。鎧を着た武士たちは修羅道で苦しんでいます。

その下は舌を抜かれている女がいます。言葉によって邪悪をする者が堕ちる地獄を抜舌地獄といいます。その下でおぼれているのは阿鼻地獄か無間地獄でしょうか。罪人が蛇に巻かれて苦しむのは血盆地獄。その左は水や食物を口に入れようとすると火に変じて食べられないという餓鬼の苦です。

一番下は親より先に死んだ子どもたちが賽の河原で石を積んでいるのを、鬼に崩されないようにお地蔵様が見守っています。

地獄が私たちの身近かでなくなるにつれて命も軽くなったような気がします。

太宰府市役所：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号　☎092(921)2121 FAX(921)1601

この広報紙は、地球環境保全のため100%再生紙を使用しています。
R100

▲正殿跡の調査（写真提供：九州歴史資料館）

太宰府の文化財 (186)

大宰府跡（特別史跡） 7世紀後半～平安時代終り

昭和43年（1968）末から始まった大宰府跡の発掘調査は30年を越え、中心の政庁域では、南門や中門、回廊、築地などの一部が発掘され、そして今回主要建物の正殿跡が本格調査されました。

ところで大宰府跡は、今から1300年前の7世紀後半から約500年間、その機能を果たした大きな役所「大宰府」が建っていた所です。大宰府は九州全体の政治や経済を統括し、外交や国防でも重要な役割を果していました。

過去の調査の大きな成果の一つは、政庁が大きく2度にわたって建て直された、つまり3期に区分される建物群があったということ、そして最後の建て替えつまり第Ⅲ期の建物は、平安時代の半ば（941年）に伊予（いよ）の海賊藤原純友（ふじわらのすみとも）の襲撃にあって焼失した後、再建されたものであることが分かったことでした。

今回の正殿跡の調査でも現在地表に見えている礎石を置いた基壇（第Ⅲ期）の下の層から別の基壇と焼け土が見つかり、周りにも焼土が広がっていました。ここでも純友の乱とそれをはさんでの建て替えの事実が裏付けられました。

また政庁最初（第Ⅰ期）の建物は礎石を使わない掘立柱の建物で年代は7世紀後半と考えられることも以前の調査の成果ですが、正殿跡でも下の層から掘立柱の大型建物が見つかりました。そしてその政庁Ⅰ期の建物が廃止された後に続いてⅡ期の正殿が造られたことが確認され、Ⅰ期政庁の機能的発展の上にⅡ期が成立したと考えて良いのではないかと結論付けられました。

もう一つ興味深い事実は、江戸時代後期（19世紀）に基壇が修復されていたことです。周囲部分を中心に瓦や耕作土が積まれ、文政年間の黒田藩の礎石保護の動きと関係するのではないかということです。

先人が残した遺跡を次の世代へ確実に伝えたいものです。

太宰府市役所：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号　☎092(921)2121 FAX(921)1601

この広報紙は、地球環境保全のため100%再生紙を使用しています。

太宰府の文化財 (187)

戒壇院鐘楼　一棟

附　棟札二枚・祈禱札一枚（県指定有形文化財）

桁行1間　梁行1間　袴腰付　入母屋造本瓦葺

江戸時代　　所在地　戒壇院

戒壇院の山門を入ると、右手先に乱石積の高い基壇の上に立つ木造の建物が建っています。これは鐘楼つまり大きな梵鐘が吊り下げられている鐘つき堂です。

このお堂が11月1日付で福岡県の有形文化財（建造物）に指定されました。

建物の形は入母屋の屋根で本瓦葺、四方に火灯窓枠が付き、周囲をぐるりと縁が巡っています。縁には跳高欄という、擬宝珠のある親柱を用いず水平材を突き出した形の手すりが取り付けられています（写真②）。下部は袴腰と呼ばれる着物の袴のような台形状の腰板が張られています（写真①）。

この鐘楼は梁に打ちつけられた棟札から江戸時代の宝永元年（1704）に建てられたことが知られます。棟札というのは建物を新築あるいは再建、修理した時に、施主や大工の氏名、年号、祈願文などを細長い板に墨書して棟木などに打ち付けたものです。宝永元年の棟札（写真③点線部分）にも年号の他、建立檀主として実空寿桂尼、白木太兵衛の名が、大工は宰府に住む恵良九兵衛、戒壇院住持として運照の名が書かれていました。

鐘楼を建てるためにたくさんの喜捨をした白木太兵衛は本堂内に安置されている宝永2年作の鑑真和上像を造るときにも檀主の一人として名が残されています。また、この鐘楼の中に吊り下げられている梵鐘には檀主白木玄流の名があり、太兵衛との関係が興味を持たれるところです。父子と考えられないでしょうか。

住持運照は元禄年間前後の戒壇院復興の立役者です。

また、修理の棟札・祈禱札として明治元年（1868）と明治35年（1902）のものがありました。

明治元年の修理の際に脇工として記されている吉田右太夫は、江戸時代以降の太宰府天満宮の造営に関わった主な大工の家の一つ吉田姓の一党ではないでしょうか。文久2年（1862）に宇太夫の名で、慶応4年（1868）に右太夫の名で、天満宮本殿の修理に権大工をした人物と同一人物ではないかと思います。

以上のように小振りではありますが全体の形も良く、建築年代が明確で、袴腰付鐘楼としては県内でも古い例に入るということから、今回の指定になりました。

①

②

③

太宰府市役所：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号　☎092(921)2121 FAX(921)1601

この広報紙は、地球環境保全のため100%再生紙を使用しています。

太宰府の文化財 (188)

絵馬「旭日松梅図」一面

縦105・2㎝　横112㎝　枠幅15㎝
板地墨書　昭和10年　日吉神社（観世音寺区）所在

昭和10年4月に敬老会が奉納した絵馬です。

旭日は喜寿つまり77歳であった萱島秀山が描き、松を秀山の三男秀峰が、梅を長男秀岳が描いています。そこに吉嗣鼓山が讃を書きました。太宰府の絵師4人の合作です。

萱島秀山は名を源太郎といい、鶴仙のちに改めて秀山と号しました。幕末の安政5年（1858）に絵師萱島鶴栖の長男として太宰府に生まれ、昭和13年（1938）80歳で亡くなりました。

絵は博多の石丸僊舟、日田の平野五岳、太宰府の吉嗣梅仙などに学び、明治15年ごろから全国的な展覧会に出品し、入賞すると共に、来福の皇族の前での御前揮毫もしばしばでした。秀山は画業の一方、明治19年から太宰府郵便局長として40余年間郵便業務に携わった人でもあります。

梅を描いた秀岳は秀山の長男として明治19年に太宰府に生まれ、花鳥・山水画を得意としましたが、父の跡を継いで郵便局長になりますので、弟の秀峰のようには作品を残していません。そして昭和14年53歳で亡くなりましたので、この絵は晩年の作品ということになります。

中心の松は秀峰の作です。秀峰は明治34年、秀山の三男として生まれ、本名健二。9歳の時、病気のため耳が聞こえなくなりますが、絵に精進し、18歳で個展を開き活躍します。花鳥画はもちろんですが山水画を特に勉強し、昭和48年71歳で亡くなるまで、御前揮毫や、博多松囃子大黒流の傘鉾の絵、太宰府天満宮の干支の絵馬の原画、有田深川製磁の干支の額皿の原画などの製作にあたりました。

この絵馬は以上のような経歴を持つ萱島家父子3人が絵筆をふるって合作した珍しい1枚です。そしてこれに讃を書いた鼓山は、太宰府のもう一つの絵師の家柄、吉嗣家の3代目です。鼓山やその父拝山についてはまたの機会にお話ししましょう。（祖父梅仙については第181号北谷の絵馬1を参照）

梵鐘

国宝である観世音寺の梵鐘の音に、色々な思いを乗せて20世紀が終わり、いよいよ新世紀のスタートを迎えた。

本市は今、まちづくりの指針となる第四次総合計画を、21世紀にふさわしいものとなるよう策定を急いでいる。

新しい時代の幕あけにふさわしい、あくまでも市民が主役の計画でなければならない。本市の将来像を「歴史とみどり豊かな文化のまち」とし、これの早期達成のため、戦略プロジェクトを設けたことが、新しい。「まるごと博物館」「地域コミュニティづくり」「福祉でまちづくり」推進プロジェクトの3本である。

市民と行政との協働・連携のもと、あなたは市（行政）に何を求め、まちづくりに何が出来るのか？　期待と不安を乗せて、いよいよ新世紀が始まる。本年があなたにとって、すばらしい年であることを願わずにはいられない。（都）

太宰府市役所：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号　☎092(921)2121 FAX(921)1601

この広報紙は、地球環境保全のため100%再生紙を使用しています。
R100

太宰府の文化財 189

吉嗣拝山の作品

明治時代～大正4年

前回に続き太宰府の絵師のお話しです。

吉嗣拝山は吉嗣梅仙の息子で、明治から大正の初期にかけて九州を代表する南画家、そして書・漢詩もよくする文人として活躍した人です。

幕末の弘化3年（1846）に梅仙の嫡男として太宰府に生まれ、大正4年（1915）70歳で亡くなります。幼名寛一、後に達太郎と名のり、字を士辞といい、拝山・蘇道人・独臂翁・独掌居士・古香と号しました。

家が貧しく13歳の時六度寺に奉公し、仕事の傍ら読書や習字に励み、その後私塾を経て、19歳の時、日田の咸宜園に入門しました。学資を工面しながらの勉強は京都の中西耕石の元での絵の修行時代も例外ではありませんでした。

そして明治初年（1868）、官吏となりますが、26歳の明治4年7月、太政官記録編輯局に出仕の途中、大風雨によって倒れた家屋の下敷きとなって右腕を切断する大けがを負います。この後、官界で身を立てることをあきらめ、文墨の道を歩むことを決心し、各地の名所旧跡を尋ね、詩書画の研鑽に努めました。

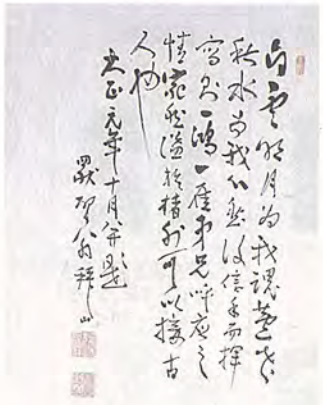
明治11年、念願の中国に旅し、揚州や蘇州を巡って彼地の文人画家と交わり、影響を受けました。拝山は右腕を切断した翌年、その骨で筆を作り愛用しますが、それは江南の旅でも評判になり、骨筆を題に中国の文人十数人と詩を詠じています。

左手だけで描く「左手拝山」の名は骨筆とともに全国に知れ渡り、晩年は多忙を極め、揮毫の依頼が山をなしたそうです。その死後、依頼を受けながら揮毫できなかったものは子息や門人たちによって滞りなく返送されたそうですが、遠くは北海道・朝鮮・満州から、そしてその数は千数百に及んだと伝えられます。

拝山が描いた山水画や花鳥画そして書の作品は太宰府やその近郊にもたくさん残されており、身近に感じられる人も多いと思います。

ここではその中の2点、山水や植物ではなく少し趣の異なる人物を描いた「鍾馗図」と、得意な画題の一つであった「芦雁図」の写真を載せました。もう1点は有名な骨筆の写真で、ご子孫のご好意で掲載させていただきました。

▲鍾馗図　絹本著色　145.0×45.0cm　明治30年



◀芦雁図　紙本淡彩　149・6×43・2cm　大正元年

▲右腕の骨で作られた筆

太宰府市役所：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号　☎092(921)2121 FAX(921)1601

この広報紙は、地球環境保全のため100%再生紙を使用しています。

太宰府の文化財 (190)

涅槃図画稿

紙本淡彩　掛幅装
大きさ　縦175㎝　横154・2㎝
西正寺蔵

釈迦が入滅（死亡）する場面を描いたものが涅槃図で、日本ではすでに奈良時代には入滅日の2月15日に涅槃会が行われていました。平安時代以降、涅槃会の形式も整えられ、涅槃図を法会の本尊とすることが定着します。そして日本では宗派に関係なく涅槃会が盛んでした。

写真の涅槃図はもともと絵の下書き、つまり絵師が持つ「画稿」といわれるものと思われます。画中には色彩の覚えである「色注」が書き込まれ、部分的には色も付けられています。絵師は注文を受けると、これを手本に絵を描きました。

江戸時代の絵師の画稿と思われる図がどうしてお寺に伝わっているか、残念ながら由来は分からないそうです。ただ、前回も書きましたように太宰府には萱島家や吉嗣家など江戸時代から絵師の家もありますし、福岡藩お抱絵師もたくさんの画稿を持っていましたので、それらの1枚かもしれません。

さて涅槃図の絵柄にはいくつかの系譜があるようですが、これは福井県織田町の劔神社に伝わる八相涅槃図（鎌倉時代）の系統を引くものです。その特徴は、画面の中央上方に描かれることが多い月が右上方にあることと摩耶夫人がのる雲のたなびき方などです。しかし劔神社本にある左右の釈迦の仏伝図は省略され、中央の涅槃図も少し縮小された形です。

この画稿の手本として最も近いと考えられる図が、博多の東長寺にあります。東長寺のは室町時代の制作ですが、大きさもほとんど同じで、これを等倍に敷き写したものが、西正寺の画稿と思われます。

お寺には「未完成画　釈迦仏涅槃図　筆者年代不詳」と伝わっていますが、これはこれで、江戸時代の絵師の仕事の一端が偲ばれ、完成品とは別の意味で貴重な1枚です。

太宰府市役所：〒818-0198　太宰府市観世音寺一丁目1番1号　☎092(921)2121 FAX(921)1601

この広報紙は、地球環境保全のため100%再生紙を使用しています。